真鶴学院風雲録

最終回　小田原は燃えているか

一.栄光

その年の出港風景はその規模において空前であり、またおそらく絶後であろう。

実際、男女双方を出港した後に残された水上戦力はほぼ絶無に等しく、それら戦闘艦艇も可能な限り動員してＭＡを分乗させた後には陸上戦力さえまともには残されていなかった。ただ一つ、航空戦力だけは空母の収容力にも限界があっていつも通りに残されていただけである。

「本土」に残されたのはほとんどが高３であった。それに期末テストが芳しくなくて補習となった各学年生も。これをまとめるのは宇垣麻美に任されていたが、嫌がらせなのは明らかではあった。

強大な火力の集中投入による戦線粉砕。

生徒会の自信は高まる一方だった。極端なまでに膨張させた艦隊の包囲・各個撃破が極めて困難なことは、すでに自分たちが証明してきたことである。

最短距離を全艦隊が突破し、一撃でケリをつける。ただでさえ劣勢の小田水は、決してこれを阻止できない。その自信が、戦艦を軸にした、単一の巨大な楔型陣を組ませていた。

生徒会が決して馬鹿ではない事の証明には、この三角形の鉛直線を挟む二直線を形成して巡洋艦以下の補助艦艇が配されて、側方からの敵襲に対応できるよう配慮されていた。また防御力、機動力に劣る船団は定石通りにこの「戦闘艦隊」から距離をおいて輪形陣を組み、砲撃力を有しない空母もまたここに置かれた。上空警戒の戦闘機もここから発進して、艦隊到達までに高度を稼ぐ算段である。

もっとも、団結意識の強い宇垣一家を後方に置いておけば、万が一艦隊がパニックに陥った場合でも、生徒会の指揮を離れて「勝手に」動き、混乱が増幅される恐れもないし、安心な理屈ではあった。

一方、生徒会つまり前進艦隊の旗艦は初雁の「真鶴」である。

先端から半歩下がった位置に位置した改大和型戦艦の巨体は周囲を圧し、見るものに対して威圧感さえ与えていた。

負けるはずがない。真鶴の誰もがその姿を見て信じていた。

二.暗雲

坂井法子のアグレッサー隊は艦隊防空の要を担うものとして期待されていたが、当日になって当の彼女が夏風邪を引いて寝込んでしまい、初陣からやや精彩を欠く結果となった。それでも戦意自体はなお旺盛ではあったが。彼らはＦＡ－１８Ｅを装備して空母に搭載されていた。空戦能力に長じたものを揃えた彼らを本土に放置する手はなく、予定通り上空警戒組に組み入れられていたのだ。入会していた山本九十九は上空から見下ろした艦隊の姿に、不安を抱かずにはいられない。

緊密すぎる。

彼は思う。これではとっさの事態に機敏に反応できない。

敵がこっちの予想通りに正面から挑んでくればいいけれど．．．

同じ不安を菅原絵馬も抱いている。

初雁の「真鶴」に比べれば、菅原の「あきたこまち」はやはり見劣りがする。彼の「１３号艦」は、排水量の比較でも２万トン以上の開きがある。ほぼエセックス級空母一隻分だが、彼の不安はそんなものではなく、何か、もっとどす黒い、とらえようの無い類いの物だった。

出港してようやく陣形を整え終えた頃、早くも前哨のＥ－２Ｃが弱いエコーを捕らえた。スピードから察してヘリコプターらしい。どうやら超低空飛行のようで、強力なＥ－２のレーダーをもってしても、敵影はともすれば消えがちであった。

ヘリコプターなのは無理もなかった。小田水には空母自体ないのだ。

しかし、なぜ航続距離の短いヘリコプターが、まだ真鶴の庭先のようなところまで進出してこれるのか？

坂井隊が迎撃許可を求めたが、即座に却下された。

ヘリに何ができるものか。偵察に決まってる。こちらを見つけさせれば、こっちが探す手間が省けていい．．．それに、そのヘリの「母艦」がどこに居るのか、それもわからない。むしろそれを手繰った方が有利だ。

聞いた初雁は目をむいたが、黙っていた。どうせ連中にはわかりっこないのだ。先に敵を見つけた方が圧倒的に有利だということを。

菅原は坂井隊に出された指示を聞いてさすがに逆上しかけたが、自分の船を離れるわけにはいかなかった。それに無線をやたらに使って、

これ以上こちらの場所をさらす愚も理解していた。
　まもなく交代の編隊がやってきて、第一陣のＣＡＰ隊は補給のために後方へ下がった。坂井隊も下がった組である。

　菅原はその時の躊躇をだいぶん後まで悔やむことになった。
　小田水のヘリはすぐに真鶴のＣＡＰ機からも肉眼で見えるようになり、すぐに艦上からもそうなった。確かに水面ぎりぎりの超低空飛行だ。これでは何かあっても、高速機主体のＣＡＰ機では満足に手が出せない。
「ハインド２機、左２５度、右へ進出」
　見張り員が双眼鏡で確認する。気の早いＣＡＰ機は早くも躍りかかかろうとしていた。
「今の目標は５機．．．１０機以上．．．３０機以上」
　初雁は、そして菅原も生唾を飲み込んだ。そんなもんじゃない。もっと多い。あまり密集しているので、レーダーでは機数まで判別できなかったのだ。
　次の瞬間、全艦隊を戦慄が走った。
「敵機は１００機以上！突っ込んでくる！」
　生徒会長より先に初雁は渾身の大声を絞っていた。
「砲撃開始！」

　結論から言えばすべてが遅すぎた。

　ハインドははじめから戦艦群を避けて側方、軽装甲の駆逐艦群を狙った。一方の水上艦艇は目標が低すぎてＳＡＭによる迎撃ができず、いきおい旧態依然の砲撃によらざるを得なくなった。ＣＡＰ機はやはり有効な照準を得られるほど低空に降りることはできず、降りられたとしてもながくその位置を維持することができなかった。それに下手をすれば味方に撃墜されかねない。
　混乱の中で、数隻が炎上した。対戦車攻撃能力を持つハインドの２３㎜機関砲とロケット弾は、撃沈は無理でも戦闘力を削ぐには充分であった。運の悪いものになるとむき出しのミサイルランチャーに直撃弾を受けて大爆発を引き起こし、そのまま爆沈している。
　小田水は逃げることの困難を知っているのかそのまま艦隊中央部へ直進する。その間、各機の機関砲座は赤い閃光を放ち続けていた。
　ようやく弾幕射撃が効果を現しはじめてヘリの姿が減り始める。「真鶴」を始め機転の利く艦長のいる船は主砲で水柱を立ててそれ以上の接近を拒んだ。しかし一方では、巻き込まれて転覆したり、着弾点に運悪く居合わせて粉砕される艦艇が続出していた。
　ようやくハインドの姿が消え失せて真鶴艦隊が一息ついたころ。

「敵編隊！直上から急降下！」

　複数の艦でほぼ同じに悲鳴に似た警告があがり、それを耳にしたものは己の耳を疑った。
　次の瞬間、艦隊中央で複数の水柱と、同じ数の火柱が立ち上った。

　菅原は呆気に取られてその光景を見つめ、そして敵の正体を知ってさらに愕然とした。
　ビヤ樽のような寸胴は紛れもなくレシプロ機である。ＳＢ２Ｃヘルダイバー．．．しかし彼にとっては名前などどうでもよかった。ざっと見て30機程度の編隊が自分に向かって来なかったことに安堵しつつ、即座に対空射撃の指揮を執る。混乱が再び始まった。今度は小田水機も無闇な低空飛行はできず、ぎりぎりなのだろうが中途半端な高度で離脱を図っていく。しかしＣＡＰ機の餌食には違いなかった。先ほどのフラストレーションを晴らすべく彼らは群がり．．．またしても、艦側からの対空攻撃が不可能になった。
　艦隊側の不満は高まった。この程度で混乱するようでは、この後どうなるのか？
　しかし生徒会側では別の問題があがっていた。初雁の発言がもとである。

「レシプロ機では、陸上からではまだここまで来れないはず」
　確かにそのはずだった。遠すぎる。
　小田水にもキエフという「軽空母」はある。しかしそれは固定翼機を運用するには中途半端で、しかもあまりにも貧相な代物だ。たとえレシプロ機なら着艦できるとしても、それよりはそのミサイル装備を使った方がはるかに役に立つだろう。
　小田水が、ついに正規空母を使う気になった？
　無い話ではない。ただ、空母には艦載機パイロットという人材上の問題がある。機体の数だけ人間が要るのだ。公立の小田水は当然高校しかないし、その点で真鶴には圧倒的に不利である。だからこそ水上艦艇の戦力充実に走らざるをえず、したがって過剰なほどミサイルを搭載したロシア艦の使用と、水際防御作戦の採用と相成る。これはどこの学校でもごく普通に見られる流れであった。少なくとも、三桁にのぼる航空戦力を擁する真鶴の方が異常なのだ。

生徒会は自らの予測に慄いた。これでは、今回の編成の前提条件となる水上艦艇同士の「殴り合い」など絵物語に過ぎなくなってしまう。何としても空母をつぶさなければ、破滅である。彼らは作戦を大転換して航空機の大部分を前方へ散らし、敵の正体の解明に入った。

遅すぎるな。菅原は思う。それで敵が一つところにいればいいが、逆に既に散っていたら？いくら象でも、アリに同時に全身に食いつかれれば、出血多量で死ぬこともありえるのだ。それに、小田水がやっていたらしい「キーロフの集中運用」はどうなっているのか？

三.奮迅

真鶴の生徒会、つまり艦隊司令部が完全に混乱に陥ったのは、本土の本部からの急報がもとだった。

小田水のＭＡが真鶴に上陸中．．．！

有りうべからざる事だった。対進しているはずの小田水の先頭が、こちらの先鋒をかわして後方にいきなり殴りかかるなど。しかし事実はまるきり異なった状況を提示している。

正面衝突を想定して充分以上に固めた陣形だが、これをかわされるなど、完全に想定外の事態であった。

索敵は一体何をやっていたのか？

これは自明であった。どうせ内職していたのだろう。

反転。とにかくこの状態を放置することは許されない。

反転したタイミングは悪くなかった。しかし状況はさらに悪化した。肥大化しきった艦列は、「想定外」の反転で完全に混乱してしまったのである。「前方」へ散っていた戦闘機隊は慌てて本土へ引き返し、無駄な燃料を浪費した上、艦隊の上空はほぼがら空きになった。

．．．帰投した戦闘機隊から驚くべき事態が報告された。そこには小田水の上陸部隊などいなかったのだ。

ハメられた。全員が愕然となったとき。小田水の艦隊が姿を見せた。最悪のタイミングで。

先に対艦ミサイルが飛んでこなかったことを少し意外に思いつつ、菅原は双眼鏡で敵の布陣を見渡し．．．絶句した。

．．．フランス艦．．．！

空母がいる。それも正規空母が。見慣れない艦影から必死で記憶の底をあさり、ようやくそれがフランス空母クレマンソー級であることに思い至った時には、その甲板から続々と新たなヘリコプターが舞い上がっていた。ハインドとは異なった寸胴の大型ヘリは、シュペル・フルロンである。

随伴する駆逐艦の、極端に幾何学的な、いかにもステルス性の高そうなデザインは、まごう事無きフランス艦のそれだった。

菅原はようやく気が付いた。敵がＳＳＭの先制攻撃を打ってこなかったのは、レーダー波を探知されて自らの位置を知られる危険を少しでも減らすためだったのだ。上空の戦闘機がそれは許さじと、残り少ない燃料をつぎ込んで迎撃に向かう。シュペル・フルロンからは次々とミサイルの発射煙が巻き起こった。そしてやはり同行していたキエフからも、もうもうたる白煙とともにミサイルが発射される。ほぼ同時に真鶴側からもハープーンが応射される。

「ミサイル迎撃！フネは後だ！」

菅原は反射的に指示したが、続いて起こった光景に、二の句を失った。

敵のヘリが次々と撃墜されていく中、ミサイルまでが勢いを失い、立て続けに海面に墜落していく。

「．．．まさか！」

菅原の脳裏には早くも推論が立っていた。しかし、まさか。

彼の疑惑を嘲笑うように前方の艦で水柱が上がり、真っ二つに叩き割られたそれは瞬時に沈没した。水柱は一本や二本ではない。続いて一隻、二隻とたちまちに姿を消していく。あたかも水でできた堅固な防壁に衝突しているかのようだ。

「面舵いっぱい！魚雷だ．．．畜生！」

彼の罵声は最後まで続かなかった。回頭しはじめた「あきたこまち」とは逆へ舵を切った隣の駆逐艦が横様に激しく接触したのだ。危険と知りつつ立っていたままの彼は艦橋を右舷まで一気に飛んで壁に叩きつけられ、あ痛いが口を衝く前に、反動で左舷の壁に再び叩き付けられる。

横方向の移動が急に停止した「あきたこまち」をかわし切れず、左舷に彼の艦隊の巡洋艦が正面から突っ込む。三度空中を飛びかけた彼

の腕を直近にいた操舵手がとっさに掴んで引き止め、菅原はようやく立ち上がることができた。
結果として菅原は九死に一生を得た。両舷に張り付いた二隻が、「あきたこまち」目掛けていた魚雷をすべて引き受けたのだ。
小田水は持てるミサイル発射能力のすべてを対戦魚雷の発射に充てたのだった。ハード・キル、ソフト・キル両面で対艦ミサイルについては有効な対抗手段が確立されてはいるが、魚雷はそれほどではない。しかし対潜魚雷は破壊力はそれほどでもなく、すくなくとも一発や二発命中した程度では、撃沈は望めない。
しかし、行動に制限を与えるには充分すぎる能力を備えていた。小田水は、まさにそこに目を付けていた。真鶴艦隊の戦力は、あっけなく半減してしまったのだ。

それでも「あきたこまち」は生き残った。周囲にもうもうたる黒煙が立ち込め、満足に視界が利かない中、彼は振り上げかけた拳の下ろし先を求めて双眼鏡をとった。

「．．．な、何だ！？」
今度こそ彼は心底動転した。巨大な船体。その中央にそびえ立つ塔型の艦橋。周囲を圧するように小田水の陣形の奥から姿を見せたそれは、見まごう事無き戦艦のそれである。
「馬鹿な．．．」
前部にまとめられた二つの幅広の砲塔。城郭を連想する塔型の艦橋。真鶴にはない艦形である。ふと初雁の「真鶴」に目を転じると、最大戦速で白波を蹴立てながら、既に主砲で応戦中だった。．．．魚雷からは逃れ得たらしい。
気を取り直して「真鶴」に続く菅原だったが、どうにもやりきれないものを感じていたのは確かだった。初手からずっと、小田水のいいように躍らされているばかりではないか。今にして思えば、キーロフの大群など、序盤の陽動作戦の訓練で、標的をつとめていたに過ぎなかったのではないのか。確かに、今までがそうだったからといって、これからもそうだという保証は、何についても存在しないはずなのだ。小田水しかり。しかしこちらは、それを考えもしなかった。
そのことの愚かさを受け入れがたく、怒りは自然、小田水の戦艦に向いた。それは生き残ったどの艦艇でも同じ事だった。
そこかしこで大口径砲が火を吐く。被弾した艦艇が猛煙を噴き上げる。本土から押っ取り刀で飛んできた陸上機が、補給を済ませた艦載機を従えて乱入する。自らの陣地の目と鼻の先で展開される醜態への反動は、小田水の対処能力をはるかに上回った。
これに先立った訓練での、二度もの「乱戦」の経験が、あるいはこの場合プラスに働いたのかもしれないとは、皮肉な見解かもしれないが。ところが、発砲の派手さに比べて、実際の戦火ははるかに低かった。林立する水柱が弾着観測を事実上不可能にして、ただでさえ散らばっている小田原艦隊の空白にばかり、弾が飛んでいったのだ。

．．．一体、何をやっているんだ。ふと、菅原は思った。対抗戦での「勝利条件」は、相手方の陣地に上陸して、司令部を押さえてしまう事のはずだ。今回いかに踏み込まれたとはいっても、小田水の艦隊はどう見ても上陸戦力まで含んでいるとは思えない。小田水の戦力はそんなに余裕はないのだ。仮に船の人間が全員上陸したとしても、真鶴の防衛戦力なら充分対応できる。

．．．つまり、この混戦はまったく意味が無い。

菅原は決断した。事は個人の問題ではない。こんな無意味な混戦でただ戦力をすり減らしたとあっては、真鶴艦隊の鼎の軽重が問われる。
決断した後は早かった。彼は手持ちの生き残りを手早くまとめると、さっさと戦場を離脱したのである。目的地は当然、小田原であった。

四.激浪

「チャーンス」
菅原が戦場を離脱していく様を目撃した野木坂若葉は、思わずそうつぶやいた。彼女は今回、久しぶりに自分の船を与えられたのだ。それがまたしても「島風」級駆逐艦であったのは、果たして偶然か、それとも生徒会の無神経の副産物か。
既に彼女が属していた戦隊は壊滅．．．というより、ほぼ全滅していた。野木坂の艦も決して軽くない傷を負っている。それでも彼女は、舳先を菅原「分艦隊」に連ねた。
同じ頃、若宮菜波は別の意味で苦戦していた。彼女は電子装備を極端に強化した「川内」級軽巡洋艦を使っていたのだが、相手がアクティブな電波をほとんど使用していない状況ではまったく役に立たず、代償として火力が減少したツケばかりが回ってきていたのだ。もっとも、悪い事ばかりでもなかった。装備重量が減ったおかげで艦が比較的軽くなり、駆逐艦並みに機動性が高くなったのだ。
もっとも、川内級は軽巡とはいえ真鶴で一般化しているスプルーアンス級駆逐艦よりも一回

り小さい船であり、あまり目立ったメリットともいえない。
「こんなバカな話ってある？」
　おかげで彼女は海戦の間中、敵弾を縫いながらこうぼやく羽目になった。

　菅原は小田原への進撃に当たって、ついてくるものは拒まなかったが、ただ一点、３０ノット以下しか出せない艦艇は容赦無く切り捨てた。「あきたこまち」が戦艦でありながら３０ノット以上を発揮する高速艦であったから、彼が最大船速で突進すれば、彼より遅い船は自然と取り残される道理である。この点に関しては一言の説得も必要なかった。
　各種合計で３０隻前後。菅原の指示の下、落伍せずに小田原に殴り込んだ隻数である。当然ながら揚陸艦艇などいない。上陸するには各艦に搭載したボートで手近な海岸へ飛び込んでいく以外に無いから、事前に砲撃をかけて海岸をきれいに「掃除する」必要がある。もっとも、この時までに小田原艦隊の全滅は菅原艦隊にも知らされており、より充実した「本体」が初雁の指揮下で――作戦の完璧な崩壊とともに生徒会は指揮する意志を喪失して、初雁の傀儡に成り下がった―――体制を整えながら小田原へ向かいつつある事も知っていた。しかし到着までにはなお１時間はかかる事が見込まれ、その間小田原を「どう料理するか」は菅原に一任された。
　菅原の予想通り、小田原沿海に敵艦の姿は文字どおり一隻としてなかった。

「おかしい。気をつけろ」
　菅原は対地砲撃に移る前に、念のためにそう指示した。いくら何でも、これはあまりに静かすぎる。真鶴がここまでナメられたとは思いたくない心理も有ったが、理性的な推論も存在した。こんなはずは絶対ありえない。何かしかけがあるはずだ。
　艦砲射撃は偉大なる先例、米海軍のそれを忠実に踏襲して極めて念入りに行われた。　海岸は地面ごと完全にフライにされた．．．はずだった。

「．．．おかしい、何かしっくり来ない」
　あと１５分、そう連絡を受けながら、菅原はどうしてもイライラが隠せなかった。こうも反応が無いのは．．．歓迎すべき事だが、理論的におかしい。今までやられ放しで、水際防御のノウハウだけは富んでいるはずの小田水が、こうも無防備をさらけ出すとは。

　全滅した艦隊の分を差し引いても、計算が合わない。
　どこか釈然としないものを感じながら、更に海岸線の艦砲射撃を続けつつ、彼は本隊を迎えた。

　揚陸艦艇がビーチングする。ぱっくりと割れた艦首から整然と陸戦機動兵器が上陸していく。ここは初雁の腕ではなく、本土防備から引き抜かれた加越京子の領分だった。
　．．．が、しかし。
　菅原の危惧はまたしても的中した。海岸に赤黒い砂の壁が出現する。

「こんなのばっかりーっ！」

　加越の断末魔が各艦の艦橋に無線を通して響く。次々に撃破されていく戦車隊の悲鳴で回線が飽和する。何だ、一体。地雷や機雷はＤＭには無いというのに。あれだけ砲撃して、まだ迫撃砲の生き残りが有ったのか？しかしこの威力は戦艦並み．．．
「戦艦並み！？」
　小田原まだこんな火力を持った戦艦がいたのか？．．．どこに？
　いた。
　６００ミリ臼砲。通称の方が有名であった。その名をカールという。
「．．．」
　察した初雁は無言の怒りに拳が締まり、無線のマイクが握り潰された。これを最後に、「真鶴」は艦隊旗艦の機能を喪失した。所詮は模型であり、こんな事態は想定外なのだ。
　「旗艦指揮能力喪失」を示す旗が揚がり、発光信号で権限が菅原に移る。事情を察するべくもなかったが、とにかく菅原は目前の問題を処理にかかった。小田原の列車砲はこちらの主砲の射程外から撃っているらしいが、それは海岸から離れている分も含めてのはずだ。小田原は真鶴よりも敷地は狭く、従って海岸からの距離はそれほど遠くない。ならば．．．
　迷っている時間はなかった。彼はためらいなく、乗艦を海岸へ向けて一直線に走らせた。指示するよりも早く、意図を理解した各艦が続く。小田原側も馬鹿ではない。すぐさま標的は彼ら戦闘艦に変わった。これは同時に、列車砲にとって海岸線が最大射程ではなく、つまり比較的海に近いところに自分たちがいる事を露呈する結果となった。
　たとえ口径は大きくとも、所詮は榴弾であり、対徹甲弾防御を施した戦艦にはかすり傷を負わせるのが精一杯である。次々と轟音を立てて戦艦群が真正面から故意に座礁していった。

喫水の浅い巡洋艦群はさらに浅い海面まで突っ込んでいく。

陸対海の砲撃戦は熾烈を極めた。しかし熾烈なだけで、戦況の推移は一方的だった。ほどなくして白旗が上がり、ここに今年の対抗戦は終結した。

記録に残る、激戦であった。

五.弔鐘

終業式当日、菅原はいつもより１時間も早く目が覚めた。誰かが声をかけたような気がしたのだが、ルームメイトはぐっすりと寝入ってしまっていてそんな気配は毛ほどもない。

まあ、こんな日もあるか。

彼は思い直してベッドを下りた。

夏の真鶴の朝は早い。すでにあたりは眩しいばかりの陽光にに包まれて、山鳩のさえずりがうるさいほどだ。沖合いには今朝の漁を終えたばかりの漁船の群れがひしめいている。焼玉エンジンの鼓動が聞こえるようだった。

彼が外へ出たのは大した理由があってのことではない。ただ、あと半年でこの真鶴を出るのだという、何か寂しさにも似た感慨が有った事は確かだろう。

海沿いの遊歩道を女子部の方へ向かって歩いていく。

宇垣が木陰に腰を下ろしている。海を眺めて。

「はやいんですね」

声をかけながら、彼は静かに歩み寄り、横に腰を下ろした。朝の潮風が肌に心地よい。

「菅原か」

宇垣はニヤっとなったが、表情に力はない。衰弱しているのはもはや誰の目にも明らかだ。

「ここんとこ、毎日ここに来てる。朝日を拝みに」

菅原はぎくりとなった。彼は対抗戦の前に、一度宇垣が喀血したところを目撃している。それも並たいていの量ではない。ハンカチを赤く染めて手から溢れ出し、床に滴るほどだ。初雁ともどもかばいに入った菅原だったが、それを拒む宇垣の腕は、病人のそれとは思えないほどの力ではあった。

「こんなにきれいな朝日は、初めて見ます」

菅原は意図的に話題をずらそうとしたが、うまく行かなかった。どうしてもあの時の姿が頭から離れない。

「夜が明けると、ああ生きてるんだ、そう思う」

彼女は言った。必要以上に重みを持っているような感じを受ける。

「模型部なんかやってると、つい戦争が怖くなくなる。．．．死ぬのがどういうことなのか、わからなくなる」

菅原は明らかに動揺した。当の宇垣がこれでは、話題をそらすのは困難だ。

「僕はかえって怖くなりましたよ．．．こないだの対抗戦」

ふと空を見上げる。ウミネコの群れがえさを求めて乱れ飛んでいた。

「狙われる怖さ。今までなかった事です」

「．．．それこそ生きてる証しだ．．．」

不意に、宇垣は菅原の肩にもたれかかった。精神的な動揺が物理的な同様を引き起こす。

「しばらくこうさしてくれ」彼女はつぶやいた。「たまには、いいだろう」

菅原は覚悟を決めた。宇垣の最期を看取るのは自分になるだろう。生き残るものの務めは果たそう。

「初雁に後でワビ入れんとな」

そのまま宇垣がどこか遠いところへ行ってしまいそうな気がして、菅原は思わず宇垣の肩に手を回した。

．．．宇垣は何も言わない。

「宇垣．．．さん．．．？」

覗き込んだ顔からは、既に血の気は失せていた。バランスを失ってそのまま倒れ込もうとするのを慌てて抱き留める。

「宇垣さん！」

答えが無い。

こうしてはいられない。しっかりと抱きかかえると、彼は女子寮へ向かって一目散に駆け出した。

起床の鐘が鳴る。

完

校長日誌

半年がかり．．．ようやく書きあがりました。弁解はしません。

一番時間がかかったのは実は対抗戦です。フランス戦艦を使う案はその途中に思い付いたようなものです。当初はアメリカ艦同士をぶつけて「同士討ち」の混乱も描こうとしたのですが．．．それ以前に書いてる当人がイメージ的に大混乱を引き起こしてしまった次第で。

レース編はボツりました。完全に楽屋オチになってしまいましたので。

さて、最後に当たって、菅原絵馬＝菅原忠幸さんには特に深い感謝を捧げなくてはなりません。

空技廠始まって以来１０年近くになりますが、その第一回から今の今にいたるまで、完全無欠の皆勤賞です。郵便事故、菊地の怠慢、どちらも小さくない障害のはずですが、前者を生き抜き、後者を耐え抜き．．．何というべきか、適当な言葉が見付かりません。

何はともあれ、本当にありがとうございました。

．．．とはいえ、まだあと１回有ります。

次回は予告通り「番外編」です。皆さん、好きな時期を選んでくださって結構です。「真鶴学園の平和な一日」でもいいですし、もっと後の時代でもいいです。

締め切りは．．．４月３０日。もっと早くに出そろえば、それだけ早く書き始められるのはいつも通りです。これからは本職も徐々に暇になるはずですから、多少はマシなペースで書けるでしょう。

校長日誌（番外編）

大戦略シリーズ専用のつもりで買ったＳＳですが、全然大戦略やってません。「いかん！」と思ったときメモも、先号を出した時以上はハマってません。（館林にしてやられてやる気が萎えたのも一因か？）で、何やってるかというと．．．

お約束通りの「サクラ大戦」であります。しかも「花組通信」に「コラムス」まで．．．何か、手が自分のものじゃないみたいです。

マリアさんとってもいいです。ボルシチとピロシキ間違えてたしなめられたのも今はいい思い出。この調子だと次回作には「もどき」が出そうではあります。．．．そうならない程度の理性はまだ残ってると思いたいですが。（汗）

業務連絡

インターネットのアドレスが変わりました。

HTTP://www2p.meshnet.or.jp/~JNR/

です。ただ電子メールは、

[redacted]

へ送ってもらわないと、全然読みに行かないので「やぎさん郵便」になってしまうので注意。

それでは、また御会いできる事を祈りつつ。